

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	和歌：文苑
Author(s)	雄次；桃江
Citation	龍南會雜誌， 6 5： 6 0 - 6 1
Issue date	1898-05-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5097
Right	

ぞ、いはゆるあその神山なりける、世にありがたき火山にして、そのもとつ形を、千年の後までも、そのまゝにといめ、そのすぢの學びのためには、こよなき標本なりとて、うちつ國の學者のたどり登るは、さらにもいはず、遠きとつ國の人さへ、遙々こゝに尋ねくといふなり、ふじの煙は、すでにたぬれども、この山の煙は、今に絶えぬは、う／＼とたちのぬばり、東に靡き、西にたゞよひ、その色の、黒き時はをちかたまでも、をぐらく、白き時は、その口までも、見えわたさるゝやうなりけり、さてその近き所は、より／＼よなどいふものゝふりて、見るも苦まげなれど、このあなたよりみるには、さるかたのわづらひもなく、春の曙、秋の夕暮、さては冬の日、ふるしら雪の下より、轟きわたりて、大空を凌ぐ、萬古の剛風も、吹きたゞず、阿蘇山上、一縷の煙、とやうたふべからん、そのけまき、えも言はずなれば、朝夕これをながむる人々のおもひも、取々なるべし、天地の理りは、呼吸のふたつにあり、この山は、その故よしを、ときあかして、餘あり、剩さへ九州の巨鎮となりて、巔を雲根のくらきにさしはさみよものむら山を子孫のやうに、したがへる、をゝしきすがたなれば、

いざ學び終へての後、はたかき名をふきでの峯の空にたてなむ、どの心おのづからおこりぬべし、あなたふど、

和歌

待花

雄

次

さけは散るものとはかねて知りながら花まつ程と心せかるゝ

惜花

さなきたに花の命のみしかきをしはしはゆるせ春の山風

落花

さそふどて恨むは人の心なり花になれぬる春の山風

人のまだいはざる所いさよし

花さそふ恨みは人のこゝろなり梢になるゝはるのやま風

この方さらによし

深山花

なかなかにのどけからまし人しらすひとりささちる山櫻花

友にかはりて初めて女子をうませたる人によみてやりける

君か代の春のかさしどさきいてま花のゆく末千代に祝はむ

花の散るを見て

桃

江

色も香も松にゆつりて山里のかせのどかにも花そちりける

春月朧

あら田野の小田の蛙の聲さへもれはるなりけり春の夜の月